

【論文】

# 知的障害者グループホームの生活における 自己決定支援についての研究 —利用者の中の自己決定の実態と 支援意識の関連を通して—

村里 優\*

**要旨：**本研究の目的は、知的障害者グループホームにおいて、利用者の生活に関する自己決定と支援意識の関係を明らかにすることである。

調査は、A 県グループホーム 756 件、職員 1,512 名を対象に、147 件 290 名から回答を得た。結果、自己決定場面は「グループホーム内での余暇に関する決定」「食事・外出に関する決定」「購入に関する決定」「共用場所に関する決定」の 4 因子が抽出された。支援意識との関連は、「グループホーム内での余暇に関する決定」「食事・外出に関する決定」には「エンパワメント重視型意識」、「共用場所に関する決定」には「自己の支援を振り返る意識」が影響し、「ヘルパー事業所の利用」「ボランティアの利用」の有無がより自己決定を促進することが示された。

本研究により、支援者が「自己の支援を振り返る意識」と「エンパワメント重視型意識」を持つことで利用者の自己決定が促進され、また様々なサービスを組み合わせることでそれらはより高まることが明らかになった。

**Key Words:** 知的障害者、グループホーム、自己決定、支援意識、地域資源

## 1. 緒言

日本における知的障害者が選ぶ生活の場として、近年ではグループホーム<sup>1)</sup>が多く選ばれている。厚生労働省社会福祉施設等調査によると、障害者自立支援法の施行された 2006 年以降から共同生活介護、共同生活援助、共に事業所数は増加しており、2007 年には 2,500 件ほどであった事業所数は 2010 年には、6,567 件とその数を 2 倍にまで増やしている（厚生労働省 2007a）。

また、知的障害児者基礎調査においては、将来の生活の場としてグループホームを選択した知的障害児、および知的障害者は平成 12 年から平成 17 年で 1.3%増加している（厚生労働省 2007b）。

---

2016 年 12 月 31 日受付／2018 年 3 月 21 日受理

\* 日本社会事業大学大学院博士後期課程

一方で河東田（2007）がグループホームに住む知的障害者は「他者管理に対し不満とともに諦めの気持ちをもっている」という問題点をあげているように、グループホーム利用者が生活の中にある様々な自己決定に関して主体的に行えていない状況があり、このような問題に対して、職員のかかわり方（Felche 2009）、職員の意識（小松 2002；薬師寺・渡辺 2007）が重要であることが明らかになっている。

しかし、グループホーム利用者が主体的に、生活の様々な場面での自己決定をしていくためには、支援員のどのような支援意識が関連しているのかが明らかになっておらず、利用者の自己決定が支援されていない状況にある。

職員のかかわり方や意識が重要であることは明らかになっているが、実践現場の中でこれらを適用させていくためには、具体的にどのような意識が利用者の自己決定を促しているのかを明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、利用者が生活の中で行っている自己決定の構造を明らかにし、どのような支援意識と関連があるのかを明らかにすることを目的とし、それらから、グループホーム利用者が生活に関わる自己決定を主体的に行えるための支援を検討する。

## II. 方法

### 1. 対象と方法

調査は、グループホーム利用者の生活場面における自己決定の実態を把握する調査票 1（「自己決定実態調査票」）と支援者の支援意識を把握する調査票 2（「支援意識調査票」）から構成された。

調査対象は、A 県の知的障害者共同生活介護及び共同生活援助とした。

調査対象の抽出にあたって、2013 年 6 月末時点で、WAM-NET「介護事業者情報」に「知的障害者」「共同生活介護」「共同生活援助」で登録されている A 県の 756 件を抽出し、調査票を 1 件につき 2 種類配布した。配布した質問紙は、グループホーム管理責任者 1 名に回答を依頼する調査票 1 と、グループホーム管理責任者に各グループホーム 2 名の支援者を選出してもらい、回答を依頼する調査票 2 の 2 種類であった。また、調査対象者に渡された書面を通じて、回答後の質問紙は専用の封筒に厳封の上、グループホーム管理責任者が取りまとめて返送するよう依頼した。

調査期間は 2013 年 8 月 10 日から 8 月 24 日までの 14 日間と依頼文に記載し、9 月 15 日までに返信用封筒により到達したものを対象とし、管理者へは 756 票、直接支援者へは 1,512 票を配布した。

また、調査時点では障害者総合支援法の改正前であり、「共同生活介護」と「共同生活援助」が存在していたため、2 つのうち両方もしくは 1 つでも登録していれば調査対象としている。

### 2. 調査内容

#### 1) 調査票 1 の内容（自己決定実態調査票）

##### (1) 回答グループホームの基本属性

基本属性については、利用人数、利用者の障害程度、利用者の年齢層、指定区分、設立年数、利用者の課題となりうる行動の有無（杉並区 2013）を尋ねた。

## (2) 生活場面における自己決定に関する項目

先行研究（藤本 1974；中武 2001；高橋 2002；障害者生活支援システム研究会 2009）よりグループホームでの生活を構成している 4 項目を抽出した。さらに、神奈川県社会福祉協議会（神奈川県社会福祉協議会 2012）、第三者評価機構（山口県第三者評価委員会 2013）、の質問紙を援用して、質問紙を作成した。

また、学識経験者、グループホーム勤務経験 3 年以上の支援者より助言を受け、内容を修正した。完成した質問項目は①夜間（日中活動より帰宅後の生活）に関する質問項目 5 項目、②飲食の時間に関する項目（飲食に関する項目含む）5 項目、③休日の余暇に関する項目 6 項目、④住環境に関する 3 項目を加え合計 19 項目となった。以上を、グループホームでの生活に関わる自己決定の実態を計る項目とした。

## (3) サービス評価に関連する項目

先行研究より抽出した、「サービス評価」については神奈川県社会福祉協議会（2012）が作成したサービス評価に関する項目を、援用して作成した。回答形式については「1 よくあてはまる」から「5 全くあてはまらない」の 5 件法とし、逆順に 5～1 点を与えて得点化した。

## (4) 地域特性の理解に関する項目

先行研究より抽出した「地域特性の理解」の項目については、5 項目についてそれぞれ「1 毎日」から「9 最近 1 年間に 0 回」までの頻度を 9 件法とし、逆順に 9～1 点を与えて得点化した。

## 2) 調査票 2 の内容（支援意識調査票）

### (1) 回答者の属性に関する項目

支援者の基本情報として、性別、年齢、雇用条件、グループホームの経験年数、勤務体制、福祉教育の経験、資格を尋ねた。

### (2) 支援意識に関する項目

福祉関係職員の支援、及びグループホームで働く職員の意識についての先行研究（小松 2002；薬師寺・渡辺 2007；鈴木 2009；石田 2011）を参考に、白石の介護観に関する尺度（白石ら 2010）を援用してグループホームでの支援にあてはまるように作成した。作成した尺度は学識経験者、グループホーム勤務経験 3 年以上の支援者より助言を受け内容を修正した。

回答形式は「1 よくあてはまる」から「5 全くあてはまらない」の 5 件法とし、逆順に 5～1 点を与えて得点化した。

### (3) 支援の質の向上についての項目

支援者の支援の質の向上について、組織の中での取り組みを把握するために、神奈川県社会福祉協議会（2012）の作成したグループホーム内での、支援の質の向上についての取り組みを援用して作成した。これを支援意識同様、得点化した。

## 3. 分析方法

「自己決定実態調査」、「サービス評価」、「支援意識」、「支援の質の向上の取り組み」に関する項目を、それぞれの平均点、及び標準偏差を算出した後、探索的因子分析を行い検討した。

これらの結果を用い、それぞれの「自己決定実態」得点を被説明変数にし、説明変数と

して職員の基本情報・教育変数を先に投入 (model1) とし、その後、支援への意識因子 (model2)、利用者変数 (model3)、組織変数 (model4)、地域変数 (model5) と順々に投入する重回帰分析を行った。統計パッケージは SPSS19.0 for Windows を使用した。

#### 4. 倫理的配慮

対象グループホームの管理責任者及び調査対象者に対して、書面にて 1) 研究の主旨、2) 調査結果は研究目的以外には使用しないこと、3) 回答者及びグループホームの匿名性を保持すること、4) 記載された調査票等は厳重に保管することを説明した。そして調査票の返信を持って、回答者から研究の同意が得られたと判断した。尚、本研究は日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理委員会の承認を得て行った (受付番号: 13-0305)。

### III. 結果

送付した調査票のうち、自己決定実態調査票においては、回収された 147 票 (回収率 19.4%) のうち未記入などの欠損データを除いた 141 票 (有効回答率 18.6%) を分析対象とした。

また、支援意識調査票においては、回収された 290 票 (回収率 19.1%) のうち未記入などの欠損データを除いた 278 票 (有効回答率:18.3%) を分析対象とした。

それぞれの調査において、どちらか一方しか回収できなかった場合や、どちらか一方に未記入などが見られたグループホームについても分析可能な一方を分析の対象としている。

#### 1. 自己決定実態調査

##### 1) 回答グループホームの基本

回答したグループホームの基本属性として、障害支援区分は、「ほとんどが中軽度」及び「中軽度がやや多い」が 58.6%、「重度の方がやや多い」「ほとんどが重度の方」が 22.8% だった。利用人数は 2~5 人が 41.8%、6~10 人が 41.8% と、10 人以下で 80% を占める結果となった。利用者は一番多い年齢層が 40 代で 36.7%、30 代が 31.3% と、40 代と 30 代で 60% を占める結果となった。また、設立年数に関しては、1 年以上 5 年未満が 31%、5 年以上 10 年未満が 32% と 1 年以上 10 年未満で 60% を占める結果となった。

##### 2) 自己決定の構造

「生活場面における自己決定」の構造を把握するため、全 25 項目 (重みづけのない最小 2 乗法、バリマックス回転) の探索的因子分析を行った。因子数は固有値 1 以上の基準を設け、さらにスクリープロットと解釈可能性をもとに判断した。因子負荷量が 0.3 以上、共通性が 0.2 以上の項目を当該因子として採用したところ、15 項目 4 因子構造となった (表 2)。

各因子の下位項目の内容として、第 1 因子はグループホーム内で過ごす場合の余暇に関する項目で構成されたため「グループホーム内での余暇に関する決定 ( $\alpha=0.666$ )」因子と命名した。第 2 因子は、食事及び外出についての項目で構成されたため、「食事・外出に関する決定 ( $\alpha=0.668$ )」と命名した。第 3 因子は買い物の項目で構成されたため、「購入に関する決定 ( $\alpha=0.624$ )」因子と命名した。第 4 因子はグループホーム内での共用場

所についての項目で構成されたため、「共用場所に関する決定 ( $\alpha=0.671$ )」因子と命名した。

それぞれの因子の Chronbach の  $\alpha$  係数が低いことに留意する必要があるが、すべての因子において 0.6 以上の値を示したことから、尺度としての信頼性は概ね確保されたと判断した。

### 3) 利用者の課題となりうる行動の構造

利用者の課題となる行動について、全 15 項目で探索的因子分析（重みづけのない最小二乗法、バリマックス回転）を行った。因子数は、固有値 1 以上の基準を設け、さらにスクリープロットと解釈可能性をもとに判断した。因子負荷量が 0.3 以上、共通性が 0.2 以上の項目を当該因子構成項目として採用したところ、11 項目からなる 2 因子が抽出された。第 1 因子は「突然他人に危害を与えるような行為がある人がいる」「自分の体を傷つける行為がある人がいる」等の項目から構成されたため、「自傷・他傷行為」( $\alpha=.780$ )と命名した。第 2 因子は、「突然走っていなくなる行為がある人がいる」「外出すると一人で帰れない人がいる」等の項目から構成されたため、「突発的行動」( $\alpha=.772$ )と命名した。各因子の信頼性係数の値は 0.7 を超えているため、尺度としての信頼性は概ね確保されたと判断し、これら 2 つの因子得点をこの後の分析に使用した。

### 4) サービス評価について

「グループホームの実践評価に関する項目」について、探索的因子分析（重みづけのない最小 2 乗法、バリマックス回転）を行った。その結果 1 因子を抽出した。評価に関する項目の下位項目は「グループホームの管理者が継続的に適切なサービスが提供されているか確認している」等の項目から構成され、「内部評価」( $\alpha=.714$ )とした。因子の信頼性係数も 0.7 以上であるため尺度としての信頼性は概ね確保されたと判断し、各因子の因子得点をこの後の分析に使用した。

### 5) 地域特性の理解について

「ヘルパー事業所の利用」(平均値  $5.70 \pm 2.6$ )、「ボランティアの利用」(平均値  $2.11 \pm 1.86$ )、「地域のスーパー等の利用」(平均値  $7.33 \pm 1.83$ )、「地域のサークル等の利用」(平均値  $4.43 \pm 2.51$ )、「近隣との挨拶」(平均値  $2.86 \pm 2.49$ )であった。

## 2. 職員を対象にした調査結果

### 1) 回答者の属性

表 1 に回答者の属性を示す。

回答者は男性と女性がほぼ半数であり、年代は 20 代が最も多く、30 代、40 代と年代を重ねるごとに減少していった。雇用に関しては常勤が最も多く 64%を占めていたものの、経験年数は 1 年以上 5 年未満が 61%と最も多かった。取得資格に関しては、49%がホームヘルパーと回答している。

### 2) 支援への意識の構造

「支援者の支援意識の構造を把握する」ことを目的として、全 31 項目で探索的因子分析を行った（重みづけのない最小二乗法、バリマックス回転）。因子数は、固有値 1 以上の基準を設け、さらにスクリープロットと、解釈可能性をもとに判断した。因子負荷量が 0.3 以上、共通性が 0.2 以上の項目を当該因子構成項目として採用したところ、26 項目 4 因子が抽出された。

第1因子は、「自己の支援を振り返る」( $\alpha=0.776$ )とした。第2因子は「意思疎通は言語だけではない」( $\alpha=0.698$ )とした。第3因子は、「グループホームのルールは支援者が決める」( $\alpha=0.679$ )とした。第4因子は、「エンパワメント重視」とした。第5因子は、「事故防止安全優先」( $\alpha=0.688$ )とした。それぞれの因子の cronbach の  $\alpha$  係数が低いことに留意する必要があるが、すべての因子において 0.6 以上の値を示したことから尺度としての信頼性は概ね確保されたと判断した(表3)。

**3) 支援の質の向上の取り組みの構造**

「支援の質の向上の取り組み」に関する項目全8項目をもとに探索的因子分析(最小二乗法, バリマックス回転)を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、さらにスクリープロットをもとに判断した。

いずれの因子においても、因子負荷量が 0.3 以下のものを削除して再度因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。第1因子は、「職務内容についてスタッフと運営主体の関係職員等の間で話し合いによる調整を行っている」等の項目から構成されたため、「グループホーム内 OJT」( $\alpha=.821$ )と命名した。第2因子は「スタッフが仕事に関する技術を習得できるよう内部研修を定期的に行っている」等の項目から構成されたため、「内部研修」( $\alpha=.764$ )とした。

**3. 支援意識との関連**

**1) 支援意識, 利用者変数, 組織変数, 地域変数と「自己決定」の関連**

利用者の生活に関する自己決定の状況と、支援者の意識との関連、及び他の要因との関連を明らかにすることを目的として、生活上の自己決定の構造として明らかになった因子「グループホーム内で過ごす余暇に関する決定」「外出に関する決定」「購入に関する決定」「他利用者との共用場所に関する決定」を被説明変数として重回帰分析を行った。説明変

表1 回答者の属性

(N = 267)

		人数	(%)
性別	男性	101	37.7
	女性	107	62.3
年代	10代	1	0.4
	20代	61	22.6
	30代	52	19.4
	40代	46	17.2
	50代	36	13.4
	60代	53	19.6
	70代	13	4.9
	N/A	6	0.3
		(平均=65.69 SD±1.60)	
雇用条件	常勤	174	64.9
	非常勤	50	18.7
	パート・アルバイト	31	11.6
	その他	5	1.9
	N/A	6	0.4
経験年数	1年未満	25	9.3
	1年以上5年未満	164	61.2
	5年以上10年未満	59	22
	10年以上15年未満	13	4.9
	15年以上	5	1.9
	N/A	2	0.1
		(平均=11.02 SD=±.66)	
勤務体制	巡回が中心	24	9
	必要な時のみ	74	27.6
	入居者がいる時は常駐	132	49.3
	その他	31	11.6
	N/A	7	0.3
福祉に関する教育	大学院	1	0.4
	大学	37	13.6
	短大	9	3.4
	福祉系以外の大学	16	6.7
	福祉系以外の短大	5	1.9
	福祉系専門学校	36	14.2
	N/A	2	0.1
所持資格	社会福祉士	20	7.5
	介護福祉士	45	16.8
	精神保健福祉士	4	1.5
	保育士	15	5.6
	介護支援専門員	10	3.7
	ホームヘルパー	132	49.3
	ガイドヘルパー	55	20.5
	看護師	2	0.7
	その他	48	17.9

数は、基本属性、支援の意識、利用者変数、組織変数、地域変数を投入する。ただし、他の要因との関連も検討するため、強制投入法を実施した。また、疑似相関を防ぐために、基本属性 (model1)、支援への意識因子 (model2)、利用者変数 (model3)、組織変数 (model4)、地域変数 (model5) と順番に投入した。

表2 生活場面における自己決定の構造

項目	因子負荷量			
	fac1	fac2	fac3	fac4
グループホーム内での余暇に関する決定 (α=.666)				
利用者の携帯電話及び固定電話の使用について場所や時間など 利用者と話し合っている	.723	-.077	.053	.218
利用者の休日の外出について場所や時間など話し合っている	.677	.257	.060	.050
新聞雑誌を共同購入する場合は利用者が相談して決めている	.430	.158	.063	.104
食事・外出に関する決定 (α=.668)				
言葉による表現が難しい利用者の場合、絵や写真を見せるなどして好みの食事を リクエストできるように工夫している	.038	.677	-.056	-.016
利用者が希望すればレストラン等に出かけて外出することがある	.039	.533	.154	.306
利用者は地域で行われている行事などに応じて参加している	.298	.454	.243	.197
利用者が週末や盆、正月等に希望すれば母体となる法人やバックアップ施設の 行事などに参加できるようにしている	.246	.391	-.037	.243
余暇の過ごし方について選択することが難しい利用者のために地域の社会資源を 利用して参加できるようにしている	.353	.376	.074	.132
購入に関する決定 (α=.624)				
買い物について何を購入するかは利用者に任せているが、 明らかに問題があるときには助言するなどの支援している	.032	.124	.750	.071
買い物について何を購入するかについては利用者が判断している	.056	-.128	.741	.180
買い物について利用者が一人で購入することが困難な場合には 本人の意思を確かめながら購入している	.195	.356	.439	-.010
共用場所に関する決定 (α=.671)				
自分で調理をしたいと望む利用者には必要に応じて調理の支援をしている	.049	.204	.091	.616
共用の部屋にあるテレビ等の利用方法については利用者が話し合いで決めている	.369	-.042	.138	.603
食堂の設備や雰囲気については利用者が決めている	.113	.116	.049	.485

表3 支援者の支援意識構造

項目	因子負荷量				
	fac1	fac2	fac3	fac4	fac5
自己の支援を振り返る (α=.776)					
利用者 と 接した 後、自 分の 態度 や 言 動 が 適切 だ っ た か ど う か を 常 に 振 り 返 る べ き だ	.784	.153	-.076	.119	.018
自 分 の 支 援 の や り 方 を 振 り 返 り 改 善 す る と ころ を 考 え る べ き だ	.719	.146	-.164	.228	.120
本・雑誌・インターネットなどから情報を得て自分の支援を照らし合わせるべきだ	.522	.270	.004	.102	.142
利用者 と 接 す る 場 合 自 分 の 感 情 が ど う 表 れ て い る か を 考 え て 支 援 を 行 う べ き だ	.431	.415	.048	.223	.038
勤や経験ではなく、知識や技術に基づかなければ利用者の状態にあった支援は提供できない	.395	.337	-.002	-.091	.181
お互いの支援への想いや価値観を常に確認しあいながら支援に取り組むべきだ	.387	.248	.053	.350	.083
支援者が運営主体によって決められたマニュアルやルールに従うことは重要である	.354	.063	.049	.192	.341
意思疎通は言語だけではない (α=.679)					
利用者の過去の生活歴や食べ物に関する好き嫌い等を把握することで意思疎通のできない人でも その人の望む支援を提供できると考える	.083	.514	.015	-.044	.295
日頃から利用者の望む支援を聞いておき、利用者の望む支援を提供するべきだ	.204	.513	.072	.176	.083
意思疎通ができない利用者でも支援者の働きかけによって意思をくみ取ることができると思う	.182	.429	-.077	.150	.045
利用者の態度や表情や変化にはすべて意味があると思う	.229	.401	-.098	.144	.038
グループホームのルールは支援者が決める (α=.698)					
グループホームは「家」であるためグループホームのルールは支援者が決めるべきだ	-.016	-.296	.588	-.159	.106
支援者は母親もしくは兄弟・姉妹のような役割であるべきだ	.013	.294	.584	.026	-.061
利用者の欠点はグループホームの中で矯正していく必要がある	-.126	-.142	.554	-.072	.079
金銭に関してはなんでも利用者の自由になることには抵抗がある	.180	-.196	.478	-.205	.005
グループホームは家族のような存在であるべきだ	.084	.327	.477	.085	.038
利用者は支援者から言われたことを聞けることが望ましい	-.106	.019	.464	.155	.171
グループホーム内では利用者が集団生活を意識する支援するべきだ	-.055	.054	.411	.127	.190
エンバワメント重視 (α=.675)					
利用者自らが課題に取り組む努力を支える必要がある	.297	.186	-.029	.656	.045
利用者が課題に取り組む機会を提供する必要がある	.261	.129	-.003	.582	.232
利用者が自ら考えた行動や判断はできるだけ対応したい	.192	.432	-.052	.490	.122
グループホームにいる間に利用者が家事を身に付けることができるように支援するべきだ	-.155	-.095	.374	.465	.102
利用者の視点に立つことがGH・CHで支援を行う上で重要なことである	.403	.417	-.005	.437	.019
利用者の利益を最優先に考えている	.296	.228	-.061	.341	.309
事故防止安全優先 (α=.688)					
利用者の安全を確保してこそその生活の質の向上がある	.037	.173	.157	.082	.735
利用者の生活に多少の不自由があっても事故が起こらないようにすることが重要だ	.154	-.040	.161	.074	.642
ほとんどの事故は防げるもので防ぐべきだ	.097	.282	.176	.142	.499

表4 重回帰分析：グループホーム内での余暇に関する決定および食事・外出に関する決定

項目	グループホーム内での余暇に関する決定					食事・行事に関する決定				
	Model1	Model2	Model3	Model4	Model5	Model1	Model2	Model3	Model4	Model5
	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
職員の基本属性										
性別ダミー <sup>1)</sup>	.071***	.086***	.039	.036	.015	.067*	.066*	.047	.048	.037
年齢	-.002	.005	.004	-.006	-.007	-.018	-.011	-.009	-.014	-.031
資格ダミー <sup>2)</sup>	-.108***	-.112***	-.132***	-.109***	-.101***	-.146***	-.151***	-.154***	-.144***	-.135***
教育経験ダミー <sup>3)</sup>	-.021	-.018	-.001	-.015	.006	.045*	.044	.032	.024	.040*
支援への意識属性										
自己の支援を振り返る		.076***	.046*	.079***	.081***		.023	.019	.034	.018
グループホームのルールは支援者が決める		.019	-.018	.008	-.003		-.012	-.024	-.019	-.030
意思疎通は言語だけではない		-.022	.001	-.036	-.051*		-.017	-.018	-.039	-.055*
エンパワメント重視		.074***	.056*	.064**	.044*		.063**	.055*	.061**	.081***
事故防止安全優先		.032	.039	.052*	.063**		-.040	-.027	-.041	-.054*
利用者変数										
障害支援区分			-.022	-.010	-.017		-.057*	-.055	-.071***	
自傷他傷行為			.203***	.206**	.163***		.148***	.154***	.138***	
突発的行為			-.264***	-.272***	-.235***		-.030	-.009	.010	
組織変数										
グループホーム内 OJT				-.142***	-.128***				.124***	.125***
座学研修				.038	.058**				-.034	-.044*
内部評価				.132***	.138***				.119***	.091***
棟・寮・グループホーム内集合ダミー <sup>4)</sup>				-.171***	-.146***				-.183***	-.131***
地域変数										
ヘルパー利用について					.068***					.103***
ボランティアについて					.182***					-.023
地域のスーパーについて					.007					.185***
サークルへの参加					-.051**					-.062**
近隣との関わり					-.072**					-.094***
決定係数	.014	.028	.100	.162	.201	.020	.027	.051	.092	.149
調整済み決定係数	.013	.024	.095	.156	.192	.018	.023	.046	.085	.140
モデル適合度	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***	.000***

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001 1): 男性=1 女性=0 2): なし=0 あり=1 3): なし=0 あり=1 4): なし=0 あり=1

## 2) グループホーム内での余暇に関する決定との関連

重回帰分析の結果、各モデルの説明力を示す「調整済み R<sup>2</sup>」が小さいことに留意する必要があるが、「自己の支援を振り返る型支援意識」「エンパワメント重視型支援意識」を持つ支援員ほど利用者がグループホーム内での余暇に関する決定を行っているということが明らかになった。

次に、利用者変数を投入したところ、支援者の意識得点が減少したため、利用者の障害支援区分や行動に支援への意識が左右されることが示された。

また、組織変数を投入したところ、内部評価に関して有意な結果が示された。次いで地域変数を投入した所「ヘルパーの利用」「ボランティアの利用」に有意な関連が示された(表4)。

## 3) 食事・外出に関する決定との関連

重回帰分析の結果、各モデルの説明力を示す「調整済み R<sup>2</sup>」が小さいことに留意する必要があるが、「エンパワメント重視型支援意識」を持つ支援員ほど、食事・外出に関する利用者の自己決定が実施されている可能性があることが示された。

さらに、グループホーム内 OJT の実施、内部評価の実施も寄与していることが示された。さらに、地域変数を投入した所、「ヘルパーの利用」「地域のスーパーの利用」が寄与していることが示された。また、地域変数を投入することで支援者の意識における「事故防止・安全優先」「意思疎通は言語だけではない」変数が負の関連を示した(表4)。



表5 重回帰分析：共用場所に関する決定および購入に関する決定

項目	他利用者との共同場所に関する決定					購入に関する決定				
	Model1	Model2	Model3	Model4	Model5	Model1	Model2	Model3	Model4	Model5
	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
職員の基本属性										
性別ダミー <sup>1)</sup>	<b>-.071**</b>	<b>-.050*</b>	<b>-.090***</b>	<b>-.098***</b>	<b>-.104***</b>	.011	<b>.018***</b>	.020	.019	.028
年齢	.028	<b>.047*</b>	<b>.049*</b>	<b>.050*</b>	<b>.050*</b>	<b>-.102***</b>	-.112	<b>-.105***</b>	<b>-.103***</b>	<b>-.096***</b>
資格ダミー <sup>2)</sup>	-.005	.005	-.004	-.001	.003	<b>-.055*</b>	-.040	-.028	-.024	-.028
教育経験ダミー <sup>3)</sup>	.037	.033	<b>.064**</b>	<b>.061**</b>	<b>.072***</b>	.035	.031	.023	.011	.001
支援への意識因子										
自己の支援を振り返る		<b>.184***</b>	.113	<b>.122**</b>	<b>.106***</b>		.023	.035	<b>.051*</b>	<b>.064**</b>
グループホームのルールは支援者が決める		.037	.017	.024	.014		.024	.030	.043	<b>.058**</b>
意思疎通は言語だけではなくエンパワメント重視		.019	<b>.045*</b>	.040	.036		<b>-.062**</b>	<b>-.064*</b>	<b>-.080***</b>	<b>-.076***</b>
事故防止安全優先		<b>-.084***</b>	<b>-.080***</b>	<b>-.081***</b>	<b>-.093***</b>		<b>-.065**</b>	<b>-.047*</b>	<b>-.049*</b>	<b>-.047*</b>
利用者変数										
障害支援区分			-.028	-.024	-.033			<b>-.114***</b>	<b>-.106***</b>	<b>-.109***</b>
自傷他傷行為			<b>-.056*</b>	<b>-.065**</b>	<b>-.089***</b>			<b>-.092***</b>	<b>-.105***</b>	<b>-.071**</b>
突発的行為			<b>-.239***</b>	<b>-.239***</b>	<b>-.221***</b>			.035	.043	.023
組織変数										
グループホーム内 OJT				<b>-.076***</b>	<b>-.071***</b>				<b>-.081***</b>	<b>-.087***</b>
座学研修				-.004	.004				.010	.012
内部評価				<b>.053*</b>	<b>.056**</b>				<b>.140***</b>	<b>.139***</b>
棟・寮・グループホーム内集合ダミー <sup>4)</sup>				-.007	.012				-.035	-.045
地域変数										
ヘルパー利用について					-.002					-.018
ボランティアについて					<b>.098***</b>					-.017
地域のスーパーについて					.041					-.009
サークルへの参加					-.017					<b>.060**</b>
近隣との関わり					<b>-.063**</b>					<b>.092***</b>
決定係数	.007	.028	.091	.099	.113	.012	.023	.041	.067	.083
調整済み決定係数	.005	.024	.085	.092	.104	.010	.018	.036	.059	.074
モデル適合度	<b>.008**</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>	<b>.000***</b>

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001 1): 男性=1 女性=0 2): なし=0 あり=1 3): なし=0 あり=1 4): なし=0 あり=1

#### 4) 共用場所に関する決定との関連

重回帰分析の結果、各モデルの説明力を示す「調整済み R<sup>2</sup>」が低いことに留意する必要があるが、model2において支援への意識因子を投入した所、「自己の支援を振り返る」因子に正の関係を示した。次に、利用者変数である「障害支援区分」「自傷他傷行為」「突発的行為」の変数を投入したところ、負の関連を示した。

次に、グループホーム属性「グループホーム内 OJT」「座学研修」「内部評価」「棟・寮・グループホーム内で集まる」という因子を投入したところ、負の関連が見られた。最後に、地域変数を投入したところ「ボランティア」を利用しているほど、共用場所に関する決定が高くなる傾向であることが見られた(表5)。

#### 5) 購入に関する決定との関連

重回帰分析の結果、各モデルの説明力を示す「調整済み R<sup>2</sup>」が低いことに留意する必要があるが「意思疎通は言語だけではなく」「エンパワメント重視」因子に関しては負の関連を示した。次に「利用者変数」を投入したところ、障害支援区分が低く、自傷他傷行為がなければ、利用者の購入に関する自己決定が行われているという結果になった。次に、組織変数を投入した所、支援への意識因子の「自己の支援を振り返る」因子が有意な関連を示した。「内部評価」因子があれば利用者の購入に関する自己決定が高くなる傾向が見られた。

次に「地域変数」を投入した所、支援への意識因子はほぼ全てで有意な関連を示し、また、「サークルへの参加」「近隣との関わり」が積極的であれば利用者の購入に関する自己

決定が行われている，という結果になった

なお，それぞれの VIF 値は 0.9 から 1.05 の間にあり多重共線性がないことを確認した．

#### IV. 考察

今回の結果から，生活の中での自己決定の実態に，支援者の「自己の支援を振り返る」意識と「エンパワメント重視する」意識が影響を与えていることが明らかになった．

グループホームでの利用者の生活を構築していく中で，利用者と話さずに支援を決定していくことはもちろんないであろうが，河東田（2007）が，グループホームの支援者の生活の幅で利用者の生活が決定されてしまうと述べていることから，グループホームでは，支援者と利用者の対話から生活の幅がうまれるといえる．しかし，利用者と話していく中で支援者主導になっていく可能性があることは否定できない．そのような時に，「自己の支援を振り返る」ことができることは，利用者の最善の利益が優先されているかどうかを自己で確認する時間を持つことができ，利用者の主体的な自己決定へとつながっていくことと考えられる．また，同様に「エンパワメントを重視」するということは，利用者の内にある潜在能力の発揮を信じるということであり，潜在能力が発揮できるように支援するということでもある．このことは，支援者の生活の幅を超えて，利用者が自らの生活を構築するときに，その力を支えるべきだと考えているということであり，利用者が自らの生活を作れるようになると考えられる．

その一方で，他利用者との共用場所に関する決定には，エンパワメント重視型意識が負の影響を与えていた．

共用場所に関する決定において，エンパワメント重視型意識が負の影響を与えていたのは，共用場所という個人の希望だけではなく，グループホームで生活するすべての利用者のことを考えなければならない場所であるため，支援者がある程度の調整を必要であると感じているためだと考えられる．

グループホームでの支援において，特に夜間は支援員 1 人に対して利用者数名を支援することが多く，その支援について多角的に見ることができない場合が多い．そのため，グループホーム責任者は，内部評価や第三者評価を活用し，支援意識について意見交換を行う場を設定する必要がある．

イギリスでは，ケアワーカーが一定の質を保てるようなケアの基準をいつでも閲覧可能な web で公開（Care Quality Commission）し，1 人で対応しなければならない支援者でも公開されている基準と自分の支援を比較して，自己の支援を振り返ることのできる環境を整えている（日本社会事業大学社会事業研究所 2005）．

これらを活用して組織内で評価を行い，活用していくことで組織の大小に関わらず，評価を活用した支援が展開できる．

また，利用者が生活の中で主体的に自己決定をする際には，ヘルパー事業所の利用やボランティアの利用の有無が影響を与えることも明らかになった．グループホーム内での支援員の意識だけではなく，様々な機関と連携をとり，グループホームでの支援を支援員だけではなく様々な機関と実施することで，利用者の主体的な自己決定を促すことができる可能性が示された．

他機関との連携については，「知的障害者の自己決定を促進するためには地域との交流が

必要である」(渡辺ら 1998 ; 與那嶺 2009)と言われており、利用者の中には、夜間や休日に地域の中での活動に参加し過ごすことを選択する利用者もいる。その場合、グループホームの支援者が一緒に活動するのではなく、地域の資源を活用していくことで、主体的な決定ができると考える。それは、支援者の生活の幅で利用者の生活が決定されてしまう可能性から考えれば、人によって生活の幅は違い、支援者だけではなく、様々な人の生活の幅に触れれば、それが利用者に影響を与えていくためであると考えられる。

知的障害者の自己決定への支援が必要な場面はもちろんグループホームばかりではないが、制度設計上グループホームに与えられた役割が知的障害者の社会参加であれば、そこで働く支援者の行う自己決定支援が知的障害者の社会参加へ向けた重要な一助であることは明らかである。

このことから、利用者の生活の中での一つ一つの自己決定は、支援者との双方向だけでなく、様々な人との多方向のやりとりから生まれ、それがグループホームでの生活の満足度へとつながっていく可能性があることを示唆している。

## V. 結論

以上から、グループホーム利用者の生活の中での一つ一つの決定は支援者の意識だけではなく、様々な機関やサービスの活用により、その決定がより利用者主体に近づくことが明らかになった。

これまでの研究においては支援者の意識が利用者の生活に影響をあたえていることから、研修等によってどのように支援者の意識を変えていくか、もしくは成長させていくかという研究が多かった。本研究の結果、支援者の「自己の支援を振り返る意識」「エンパワメント重視型意識」が利用者の自己決定に影響を与えていることが明らかになった意義は非常に大きい。グループホームの支援者に関する研修の中で、自己の支援を振り返るための方法や、考え方、グループホーム内における定期的な自己の支援を振り返るための機会の提供など、この結果から広がる実践は少なくない。これは、エンパワメント重視型意識に関しても同様である。

しかし、利用者の自己決定を促す支援が重要であることを習得していても、現場の中で多くのパラドックスに出会うことがある。その際に施設などの多くの支援員がいる中での支援とは違い、1人で全てを決めなければならない状況で、その支援を決めることができずに迷うことがグループホームでは見受けられていた。しかし、グループホームでの支援を同じグループホームの中だけで終わらせるのではなく、地域の様々なサービスを活用していくことで、利用者の自己決定をより主体的に支援できることが現場で共有されれば、グループホームの支援者が1人で支援を決めなければならないという状況の中でも、利用者がより主体的に自己決定できる支援を提供することが可能になる。1人の利用者にたくさんの支援が入るということは、それだけ多くの人々が、その利用者を多角的に見るということであり、このことは、地域の視点からとらえても、知的障害者が地域の中で生活していくために必要なネットワークの構築に関する情報の共有にもつながっていくだろう。

障害者総合支援法の改正により、グループホームでも外部サービスの利用が可能になった今、本研究で明らかになった支援者の意識に関する研修と外部サービスの利用を組み合わせることで、知的障害者グループホームにおける生活の中での利用者の自己決定を支え

る実践に影響を与えることができるようになるであろう。

また、本研究で提示された結果よりも、さらに詳細にグループホームでの生活をとらえることができれば、個別援助計画を作成する際にも有効活用できると考える。さらに、他機関との連携により、利用者の生活の質の向上にもつながっていくことが考えられる。

留意しなければならないのは、どの自己決定に関しても、ある程度の障害程度が関係していることである。障害支援区分が高ければ高いほど、自己決定が困難になる可能性を示している。

なお、本研究は利用者の生活場面における自己決定の実態を支援員の回答により把握しているため、利用者本人から実態を把握していく必要があるだろう。また、回収データも少なかったことから、この結果には限界があると言わざるを得ず、今後さらなる検討が必要である。

**謝辞** 調査に協力していただいた知的障害者グループホーム・ケアホーム・地域生活支援センター職員の皆様、アンケート調査に回答していただいた回答者の皆様に感謝申し上げます。

**付記** 本研究の一部は日本社会福祉学会九州部会第56回大会にて発表した。本稿は日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科に提出した修士論文を一部加筆・修正したものである。

## 注

- 1) 調査時点では障害者グループホームとケアホームが法律上存在していたが、法改正により現在はグループホームに一本化されているために、本文中はグループホームという単語で統一した。

## 引用文献

- Care Quality Commission (<http://www.cqc.org.uk/about-us>, 2014.1.1).
- Conroy, J. W. (1996) The Small ICF/MR Program: Dimensions of Quality and Cost. *Mental Retardation*, 34, 13–26.
- Felche, D. (2009) The Determinants of Staff and Resident Activity in Residential Services for People with Severe Intellectual Disability: Moving beyond Size, Building design, Location and Number of Staff. *Journal of Intellectual and Developmental Disability*, 23(2), 103–119.
- 藤本 武 (1974) 『最近の生活時間と余暇』労働化学研究所。
- 石田晋司 (2011) 「スウェーデンの精神障害者地域生活支援を担う personligt ombud の支援観——ヴァルムランド県における調査をもとに」『社会問題研究』60, 119–27。
- 河東田博 (2007) 『福祉先進国における脱施設化と地域生活支援』現代書館。
- 小林 博 (2000) 「知的障害者の自己決定——その根源と実践」「施設変革と自己決定」編集委員会編『権利としての自己決定——その仕組みと支援』エンパワメント研究所。
- 小松聖司 (2002) 「知的障害者グループホーム・生活グループホームにおける支援に関する研究」『社会福祉学』42(2), 106–117。

- 厚生労働省（2014a）「厚生労働省が実施する社会福祉施設等調査の結果を用いて2007年から2010年までの共同生活介護・共同生援助ごとに整理を行った」（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/23-22.html>, 2014.1.1）.
- 厚生労働省（2014b）「厚生労働省知的障害児（者）基礎調査における『将来の生活の場の希望』の項目に関してグループホームと回答した者を整理した」（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/101-1b.html>, 2014.1.1）.
- 中武啓至・鈴木義弘・小野篤徳・ほか（2001）「グループホーム入居者の生活時間の特徴について——知的障害者グループホーム入居者の住生活領域に関する研究 第1編」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2002, 337-8.
- 日本社会事業大学社会事業研究所（2005）『英国の居宅ケア基準——ケア基準法2000に基づく全国最低基準規則』
- 白石旬子・大塚武則・影山優子・ほか（2010）「介護老人福祉施設の介護職員の『介護観』に関する研究——経験年数、教育、資格による相違」『介護福祉学』17(2), 164-75.
- 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会かながわ福祉サービス第三者評価推進機構（XXXX）『障害者グループホーム・ケアホーム第三者評価』評価結果からの課題整理と課題解決に向けた方策・制度的課題への提言について」
- 障害者生活支援システム研究会（2009）『障害者の「暮らしの場」をどうするか グループホーム・ケアホームで働く195人のタイムスタディから考える』かもがわ出版.
- 杉並区障害福祉サービス等支給ガイドライン（2013）
- 鈴木 良（2009）「グループホームにおける知的障害者・世話人・職員の相互行為に関する一考察——日課・飲食・外出に関わり決定の統制過程」『社会福祉学』50(1), 68-81.
- 高橋幸三郎（2002）『知的障害をもつ人の地域生活支援ハンドブック——あなたと私とともに生きる関係づくり』ミネルヴァ書房.
- 高橋 昇（2010）「地域を作り地域で生きる——岩手県における自閉症障害児の地域支援と地域づくりについて」『発達障害研究』32(1), 52-60.
- 渡辺勘持・大島正彦・三田優子・ほか（1998）「グループホームにおける重度知的障害者の生活と援助体制——愛知県内のグループホーム調査より」『発達障害研究』20(2), 52-60.
- 薬師寺明子・渡辺勘持（2007）『『本人主体を志向した支援』における促進要因と阻害要因——知的障害者グループホーム世話人を対象として』『社会福祉学』48(2), 55-67.
- 山口県第三者評価委員会（2014）「福祉サービス第三者評価事業」（<http://www.yamaguchikensyakyo.jp/html/daisansha.htm>, 2013.6.30）.
- 與那嶺司・岡田進一・白澤政和・ほか（2009）「生活施設における支援環境と知的障害のある人の自己決定との関連——担当支援職員による質問紙に対する回答をもとに」『社会福祉学』50(3), 41-53.

**Study on Support for Self-Determination of Person  
with Intellectual Disabilities in Group Home Life:  
An Investigation into Actual Conditions and Staff Awareness**

**Yuu MURAZATO**

This research is that aims to about management for boost on participation in group home life based on relationship on staff awareness ant it.

Conduct a survey of staff awareness is 1512 staff and group home life is 756 home, and reply to 147 home and 290 staff.

A result, it is 4 factors, 1<sup>st</sup> factor is “participation in home management”, 2<sup>nd</sup> is “participation in community event”, 3<sup>rd</sup> is “shopping in oneself”, and 4<sup>th</sup> is “participation in residential environment”.

Relationship of various factor and staff awareness is “participation of home management” and” participation in community event” are related to “empowerment importance awareness”, “participation in residential environment” is related to “awareness to reconfirmation of their own care”, and it is the important that make use of home helper and volunteer.

This study clarified to boost on participation of group home life through to the comprehensive action including local society resources.

**Key Words:** Person with intellectual disability, Group home, Participation in group home life, Staff awareness, Local society resources